

令和4年度 外国語活動・外国語科経営について

1 本校外国語活動・外国語科のねらい

- 相手に伝えるための言語表現などの、知識や技能を習得することができるようにする。
- 目的意識をもって、言語や非言語の工夫を取り入れ、伝え合うことができるようにする。
- 伝え合うことを楽しみ、獲得した表現を日常生活や他の学習に生かそうとする態度を養うことができるようにする。

2 目指す子ども像

「何のために外国語の学習をするのか。」

外国語活動・外国語科の学習において様々な活動を設定するが、上述した問いのように、何のために活動するのかという目的意識を子ども自身がもつことが、必要不可欠である。子どもは、目的が明確にあると、試行錯誤しながら必要な表現を獲得しようとする。そして獲得していく中で、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を豊かにしていくとともに、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を獲得していくのである。つまり、目的意識がコミュニケーションを図る原動力になるのである。

そこで、本校外国語部は、目的意識をもって自分の思いを伝えることを楽しむ子どもの育成することを大切にする。「目的意識をもって伝える」とは、学習の目的を達成するために、必要な英語表現を用いて、思いを伝えようとするものである。「伝えることを楽しむ」とは、何とかして伝えようと、試行錯誤しながら取り組むことである。伝えることを楽しみ、成功体験を積み重ねることで、さらに意欲を高め、主体的に学ぶ姿へとつながると考える。

以上のことから、本校外国語部が目指す子ども像を次のように設定する。

目的意識をもって伝えることを楽しむ子どもの育成

3 学習過程

(1) 単元全体を通して目的意識をもつことができる基本的な学習過程

願いや問いを抱く	よりよい表現を見いだす	目的を達成する
場面設定から目的 (Unit Goal) を見だし、目的達成のための願いや問いを基に、学習計画を立てる。	言語活動を通して、目的達成のためのよりよい表現を見いだしていく。	見いだした表現を用いて、コミュニケーションを図る。また、第1時と比較することで、自己の成長を実感する。

(2) 1単位時間における目的意識をもつことができる基本的な学習過程

出会う	深める	解決する	振り返る
目的・場面・状況に応じたコミュニケーション活動をやってみることで、課題を見だし、Today's Goalを立てる。	本時の課題を解決するための表現を獲得する。 ・チャンツ、歌など ・アクティビティー	本時の最初に行なったものと同様の表現を用いるコミュニケーション活動を再度行う。	導入と終末のコミュニケーション活動を比較することで、自己の成長を振り返るとともに、次時の学習へとつなげる。

4 方策

(1) 場面設定について

子どもが目的意識をもって伝えることを楽しむためには、学びの必要性を感じ、満足感を味わうことが大切である。満足感とは、子どもが、場面や状況に応じて知識・技能を活用できたと実感することであると考え。子どもが学びの必要性を感じ、満足感を味わう学習を成立させるための条件の一つは、子どもが願いや問いを抱くことである。そこで、単元の導入時に、子どもが願いや問いをもつ場面を設定する。場面設定の在り方として、以下の三つを提案する。

① 目的を明らかにして願いを抱く
外国の小学生と交流するなどの行事等について知り、そのために伝え合う内容を考え、表現したいという願いを抱く。
② 課題から願いを抱く
目的における場面や状況等に応じて、まずやってみることで、課題意識をもち、必要な表現を知り、伝えることができるようになりたいという願いを抱く。
③ よりよいやり取りを選ぶことで問いを抱く
教師と ALT のよりよいやり取りを選ぶことで、目的における場面や状況等に応じた必要な表現について問いを抱く。

(2) 自主的に学ぶ環境づくり

目的と自己の課題に応じて、学ぶ手段を自ら選択できる環境をつくる。

○ チャント

Chromebook のデジタル教科書から、いつでもチャントを聞くことができ、表現や発音の確認をすることができる。

○ 映像資料

今までに記録してきた自分や友達の映像を見返すことで、既習の確認やよりよい表現を見つけることができる。

○ ALT との対話

試しに ALT と対話してみることで、自己の課題に気付いたり、表現の適切さを確認したりすることができる。

(3) 自己の成長を実感する振り返り

単元や1単位時間の導入で行った際と同じ表現を用いるコミュニケーションを単元及び1単位時間の終末でも行う。その際、タブレット端末を用いて、自分たちのやり取りの様子を記録しておく。学習前後でのやり取りを比較することで、自己の成長を実感し、満足感を得ることにつながる。また、自己評価だけでなく子ども同士で相互評価を行い、互いの変容を伝え合うこともできる。